

病害虫発生予察情報(1月予報)

令和5年12月27日
静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (1月の県平均平年値)	予報の根拠
トマト	葉かび病・ すすかび病	発生量：やや少 (発病株率 9.7%)	12月中旬発生量:少 (－) 気象予報:気温:高い (＋) 降水量:ほぼ平年並 (±)
	灰色かび病	発生量：やや少 (発病株率 3.9%)	12月中旬発生量:少 (－) 気象予報:気温:高い (＋) 降水量:ほぼ平年並 (±)
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：やや少 (発病株率 2.7%) コナジラミ類発生量：多 (寄生株率 9.8%)	12月中旬発生量 黄化葉巻病:少 (－) コナジラミ類:多 (＋) 気象予報:気温:高い (＋)
	ハモグリバエ類	発生量：並 (寄生株率 1.0%)	12月中旬発生量:やや少 (－) 気象予報:気温:高い (＋)
だいこん	白さび病	発生量：少 (発病株率 7.5%)	12月中旬発生量:少(発生なし) (－) 気象予報:気温:高い (－) 降水量:ほぼ平年並 (±)
	モザイク病 (アブラムシ類)	モザイク病発生量：やや少 (発病株率 2.0%) アブラムシ類発生量：多 (寄生株率 3.0%)	12月中旬発生量 モザイク病:少(発生なし) (－) アブラムシ類:多 (＋) 気象予報:気温:高い (＋) 降水量:ほぼ平年並 (±)
	コナガ	発生量：多 (寄生株率 0.4%)	12月中旬発生量:多 (＋) フェロモントラップ誘殺数:並 (±) 気象予報:気温:高い (＋) 降水量:ほぼ平年並 (±)
	ナモグリバエ	発生量：やや少 (寄生株率：17.9%)	12月中旬発生量:少 (－) 気象予報:気温:高い (＋) 降水量:ほぼ平年並 (±)
キャベツ	菌核病	発生量：少 (1月平年値なし)	12月中旬発生量:少(発生なし) (－) 気象予報:気温:高い (＋) 降水量:ほぼ平年並 (±)
たまねぎ	灰色腐敗病	発生量：やや多 (発病株率 0.0%)	12月中旬発生量:並(発生なし) (－) ポトリチス葉枯症12月中旬発生量:やや多 (＋) 気象予報:気温:高い (＋) 降水量:ほぼ平年並 (±)
	腐敗病	発生量：多 (発病株率 1.4%)	12月中旬発生量:多 (＋) 気象予報:気温:高い (＋) 降水量:ほぼ平年並 (±)

作物名	病害虫名	予報 (1月の県平均平年値)	予報の根拠
たまねぎ	ネギアザミウマ	発生量：やや多 (寄生株率 29.3%)	12月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)
ねぎ (白ねぎ)	さび病	発生量：少 (1月平年値なし)	12月中旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	べと病	発生量：少 (1月平年値なし)	12月中旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)
レタス (非結球レタ スを除く)	べと病	発生量：少 (発病株率 1.5%)	12月中旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	斑点細菌病	発生量：少 (発病株率 2.0%)	12月中旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い (-) 降水量：ほぼ平年並 (±)
いちご	灰色かび病	発生量：少 (発病株率 0.5%)	12月中旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	うどんこ病	発生量：やや少 (発病株率 1.3%)	12月中旬発生量：少 (-) 気象予報：気温：高い (+)
	炭疽病	発生量：やや多 (発病株率 1.1%)	12月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (+)
	アブラムシ類	発生量：やや多 (寄生株率 1.6%)	12月中旬発生量：並 (±) 防除員からの報告：やや多 (+) 気象予報：気温：高い (+)
	ハダニ類	発生量：多 (寄生株率 13.3%)	12月中旬発生量：多 (+) 気象予報：気温：高い (+)
	アザミウマ類	発生量：多 (寄生株率 2.3%)	12月中旬発生量：多 (+) 気象予報：気温：高い (+)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年（静岡県過去の10年間）との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年（静岡県過去の10年間）との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況（調査時期と発生量）、気象庁の1ヶ月予報（気温と降水量）を記入しています。その状況が多発要因の場合は（+）、少発要因の場合は（-）を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報
はこちら
で検索！



静岡県農薬安全使用指針
・ 農作物病害虫防除基準

<https://www.s-boujo.jp/>

2 予報の根拠と防除対策

【トマト】

<生育の概況>

生育は平年並～やや遅い。

●葉かび病・すすかび病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均発病株率は4.8%（平年12.3%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。また、例年12月以降はハウスの密閉による多湿で、発生が増加するため注意する（本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・ 葉かび病については、葉かび病抵抗性品種（Cf-9）を侵すレース2.9の発生が県内で確認されている。本県では12月以降は葉かび病の発生が増加する傾向があるため、葉かび病抵抗性品種を栽培しているほ場でも薬剤の予防散布を行い、葉かび病の発生に注意する。
- ・ 本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・ 多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に撤去する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.6%（平年発病株率3.0%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。また、例年12月以降はハウスの密閉による多湿で、発生が増加するため注意する（本病の生育適温は23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・ 株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
- ・ 予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・ 発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除き、ほ場外に撤去する。
- ・ 朝夕の急激な冷えこみによる結露は、本病の発生を著しく助長する。そのため、暖房機利用や循環扇による通風などにより植物体への結露を防止し、施設内の湿度低下に努める。

●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.2%（平年3.4%）と平年より少なかった。
- ・ コナジラミ類は、平均寄生株率21.7%（平年11.8%）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、媒介虫タバココナジラミの増殖を助長する。このため、本病の発生も助長する。

防除対策

- ・ 発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、適切に処分する。
- ・ 脇芽や摘果などの残さは放置すると野生生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・ タバココナジラミ成虫の新芽への寄生や黄色粘着板での捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。
- ・ 収穫残さは本病の伝染源となるため、栽培終了後は植物体を完全に枯死させてから施設外へ持ち出す。

●ハモグリバエ類

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.7%（平年2.2%）と平年よりやや少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 葉表の白点（産卵痕）や絵描き状の食害痕に注意し、発生が認められる場合は薬剤防除を実施する。本種は幼虫期間が数日から1週間程度と短いため、初期の絵描き症状を見つけたら、薬剤防除を実施する。

【だいこん】

<生育の概況>

生育は平年並～やや遅い。

●白さび病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、発病は確認されなかった（平年発病株率2.6%）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、発生を特には助長しない（本病は多湿を好み、分生子の発芽最適温度は10℃程度である）。

防除対策

- ・ 発病残渣は翌年の伝染源となるため、ほ場に放置しない。
- ・ 排水を良好にするなどして多湿にならないように努める。

●モザイク病（アブラムシ類）

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（年間発病株率 1.8%）。
- ・ 本病の媒介虫アブラムシ類は、一部の調査ほ場で多発した影響もあり、平均寄生株率 16.5%（年間 2.3%）と年間より多かった。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ年間並だが、気温は年間より高いため、アブラムシ類の増殖を助長する。このため、本病の発生も助長される。

防除対策

- ・ 雨が降らない日が続くとアブラムシ類が急増する場合があるので、ほ場内の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。
- ・ 被害株も伝染源となるため、速やかに抜き取り、適切に処分する。

●コナガ

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は 1.3%（年間 0.6%）と年間より多かった。
 - ・ フェロモントラップによる本種の誘殺数は、年間並に推移している。
 - ・ 1か月予報では、降水量はほぼ年間並だが、気温は年間より高いため、本種の増殖を助長する。
- ・ 防除対策
- ・ 発生が多い場合は、薬剤を葉裏にかかるように散布する。

●ナモグリバエ

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は 1.8%（年間 9.3%）と年間より少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ年間並だが、気温は年間より高いため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 上位葉に白点（産卵痕）や絵描き状の食害痕が多数見られる場合は、防除を実施する。

【キャベツ】

<生育の概況>

収穫期に入っていて、生育は年間並である。

●菌核病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（年間発病株率 0.4%）。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ年間並だが、気温は年間より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 収穫期に入っているほ場では防除の必要はないが、1月下旬以降に収穫予定のほ場では注意が必要である。
- ・ 薬剤防除は予防散布や発生初期に散布を行う。複数回散布する場合は、系統の異なる剤を選択する。

【たまねぎ】

＜生育の概況＞

生育は平年より7～10日程度進んでいる。

●灰色腐敗病

予報の根拠

- ・12月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生なし）。本病は鱗茎だけでなく、葉にも斑点状の症状が現れることがある（ボトリチス葉枯症）が、その平均発病株率は1.4%（平年0.3%）とやや多かった。
- ・本病は多雨で発生が助長される。1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・春期収穫の作型では、過剰な施肥や肥料の遅効は本病の発生を助長するため、適切な施肥管理に努める。
- ・葉身に白斑や葉先枯れが見られるほ場や例年発生が見られるほ場は、鱗茎への感染を予防するため、薬剤による防除を実施する。複数回散布する場合は、系統の異なる薬剤を選択する。
- ・罹病球やくず球は、ほ場付近に放置すると発生源となるため早期に取り除き、ほ場外に持ち出して適切に処分する。

●腐敗病

予報の根拠

- ・12月中旬の巡回調査では、平均発病株率1.8%（平年0.4%）と平年よりも多かった。
- ・病原細菌の生育適温は20～23℃で、強風雨や多湿な環境により発生が助長される。1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・本病に対する防除は、定期的な薬剤散布よりも、感染の機会が生じる前後をねらった防除の効果が高い。このため、気象情報に注意し、強風雨の前後に薬剤散布を行う。
- ・発生が確認されたほ場では被害株を抜き取り、今後の感染防止を図る。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・12月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は24.2%（平年26.1%）と平年並だった。被害を示す被害度は18.7（平年14.0）と平年よりも高かった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・例年1月は特に防除の必要はないが、温かい日が続くと増殖を始め、生息密度が高まるので、発生状況に応じて薬剤防除を実施する。

【ねぎ（白ねぎ）】

＜生育の概況＞

収穫は平年並～7日程度遅れている。

●さび病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率3.5%）。
- ・ 本病は、気温10～22℃の時期に降雨が続くと発生が多くなる。1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 収穫期に入っているほ場では防除の必要はないが、1月下旬以降に収穫予定のほ場では注意が必要である。
- ・ 薬剤防除は予防散布や発生初期に散布を行う。複数回散布する場合は、系統の異なる剤を選択する。

●べと病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率0.5%）。
- ・ 本病は、気温15～20℃で降雨が続くと発生が多くなる。1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 収穫期に入っているほ場では防除の必要はないが、1月下旬以降に収穫予定のほ場では注意が必要である。
- ・ 薬剤散布は予防散布や発病初期に散布を実施する。

【レタス（非結球レタスを除く）】

<生育の概況>

生育は平年並～早い。

●べと病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率 1.0%）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない（病原菌の生育適温は 10～15℃で、多湿を好む）。
- ・ トンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなるので注意する。

防除対策

- ・ 初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ 罹病残渣はほ場外に処分する。
- ・ トンネル被覆後は、過湿にならないよう換気に努める。

●斑点細菌病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率 0.7%）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない（本病は比較的低温で多湿条件を好むため、トンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなる）。

防除対策

- ・ 発病は主に結球期以降であるが、結球前に薬剤の予防散布をして葉面の病原細菌密度を下げるのが重要である。
- ・ 降雨が続くときや初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ トンネル被覆後は、トンネル内が高温多湿にならないよう換気に努める。

<その他の病害虫>

●菌核病

- ・ 12月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率 0.3%）。
- ・ 発病後の薬剤散布では効果が劣るため、常発地では定植後 30～40 日で、本葉が 8～10 枚程度出葉した頃を目安として予防散布を行う。
- ・ 発病株には菌核が形成されて伝染源となるので、ほ場に放置せず速やかに撤去する。

【いちご】

＜生育の概況＞

県下全域で生育は平年よりやや遅い～遅い。巡回調査時点では、概ね第一果房結実期にあたる。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率 0.3%）。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 本病は気温が 20℃前後、多湿条件下で多発生するため、施設内の多湿、朝夕の冷えこみによる植物体の結露は、本病の発生を著しく助長する。循環扇や暖房機の利用、換気、かん水量の調整等で湿度を管理し、耕種的な対策を行うこと。
- ・ 曇雨天が続く場合は、施設内の多湿を避けるために薬液散布でなく、くん煙剤を利用した防除を行う。
- ・ 株が過繁茂となると発生が助長されやすいため、下葉や不要な果梗枝の除去を適切に行う。また、発病した果実や茎葉は有力な伝染源となるため速やかに除去し、ほ場外で処分する。
- ・ 発病前から定期的に予防散布を行う。薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均発病株率は 0.4%（平年 1.5%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 胞子の発芽適温は 20℃前後であり、施設内は本病の発生に好適な環境となるため、発生予防に努める。
- ・ 多発生すると防除が困難であるため初期発生に注意し、発病が確認されたら速やかに防除を行う。
- ・ 株が過繁茂となると発生を助長しやすいため、下葉除去を適切に行う。果実でも頻繁に発生するため、発病果の速やかな除去を徹底する。

●炭疽病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均発病株率は 1.0%（平年 1.1%）と平年並であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 周囲の健全な株へ容易に伝染が生じるため、発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。
- ・ 発病株は培地も含めて抜き取り、ビニール袋に入れて圃場外へ出す。放置残渣は伝染源となるため、殺菌処理を行ってから処分する。
- ・ 発病後は薬剤による治癒が困難なため、定期的な予防防除を心がける。特に下葉除去など株が傷つくような作業後は、重点的に予防を行う。なお、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- ・ 厳冬期も緩やかに病徴は進展するため、新たな発病に注意する。また、開花、着果により株に負担がかかると萎凋症状が進展する場合がある。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は2.1%（平年2.6%）と平年並であった。
- ・ いちご病害虫防除員6名からの報告によると、本種の発生について4名が「やや多い」と回答した。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 冬期は施設内への侵入は少なくなるが、寄生を認めた場合は少発生のうちに防除する。
- ・ 天敵を利用しているほ場では、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は26.0%（平年16.9%）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 寄生が認められた場合は、少発生のうちに防除する。
- ・ ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、天敵や気門封鎖剤を利用する。なお、気門封鎖剤は卵への効果が低く残効性が期待できないため、5日間隔程度で連続散布する。
- ・ 天敵を利用する場合は、ハダニ類の発生状況をよく観察する。発生が多い場合には、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●アザミウマ類

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は4.8%（平年2.1%）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 花における発生状況をよく観察し、寄生を認めた場合は少発生のうちに防除する。また、必要のない花は摘み取る。
- ・ 例年多発するほ場では、開花初期の防除を徹底する。

3 季節予報

● 1か月予報 (東海地方 令和5年12月21日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 12月23日から1月22日

【予想される向こう1か月の天候】

特に注意を要する事項	2週目は気温がかなり高くなる見込みです。	
向こう1か月	天候	平年に比べ晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率60%です。
1週目	気温	1週目は、平年並の確率50%です。
2週目	気温	2週目は、高い確率80%です。
3～4週目	気温	3～4週目は、高い確率50%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	30	60
1か月	降水量	30	40	30
1か月	日照時間	30	40	30
1週目	気温	20	50	30
2週目	気温	10	10	80
3～4週目	気温	20	30	50

【予報の対象期間】

1か月 : 12月23日(土)～1月22日(月)
 1週目 : 12月23日(土)～12月29日(金)
 2週目 : 12月30日(土)～1月5日(金)
 3～4週目 : 1月6日(土)～1月19日(金)

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1よりも多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病虫害防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL https://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html
--